

靜 物

庄
野
潤
三

講
談
社

せい ぶつ
静 物



昭和35年10月15日 第1刷發行

著 者 しやう の じゆん ざう
庄 野 潤 三
¥ 320 發 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 豐國印刷株式會社

(黒柳製本)

發行所 東京都文京區 株式 講 談 社
音羽町3ノ19 會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

© J. Shyono 1960. PRINTED IN JAPAN

目次

静
物……………5

蟹……………101

五人の男……………127

相客……………173

イタリア風……………201

題
字

直木久蓉

靜

物

「釣堀に行かうよ」

と云ひ出したのは、男の子であつた。

その日は日曜日で、三月の初めてであつたが、もう春がすぐそこまで來てゐるかと思ふやうな天氣の日であつた。

有難いことに風が無かつた。

「釣りはダメだよ。とても釣れやしないよ」

と父親が云つた。

「ダメなことなんかないよ。子供でも釣つてゐるよ。ます子ちゃんは五匹釣つたよ」

「何を釣つたんだ」

「きんぎよ」

「金魚か」

父親はがっかりしたやうな聲を出した。

「金魚ぢや、つまらないよ」

「つまらないよ。大きい魚を釣つてる子供もゐるよ」

「さうか」

「お父さんなら大丈夫だよ」

小學一年生の男の子はさう云つた。

「いや」

と父親は云つた。

「やつたことがないんだ。海で釣つたことがちよつとあるだけだ。ああいふ釣堀のやうなところは、一回も行つたことがない」

氣の弱いことを彼は云つたものだ。

「やつてみたら、釣れるかも知れないわ」

今度は小學五年生の女の子が云つた。

「一回、やつてみたら？ 釣れなくてもいいぢやないの。面白いわ」

「さうだな」

と彼は云つた。

「やつてみないことには分らんわけだ。お前の云ふ通りだ」

「三人行けば、誰か釣れるかも知れない」

女の子は腰の重い父親が行く氣になつたのを見て、さう云つた。彼女は父親がためらつてゐる時とか、何か心配してゐる時など、よくこんな風に云つて勵ます子である。不思議にさういふところのある子供である。

あの日の朝、部屋の間つこに縫ひぐるみの仔犬と一緒にころがつてゐた。何が起つたかを知らないで、みなし子のやうにころがつてゐた。あの時は生れてからまだ一年とちよつとの子供であつたのだ。

「行つてらつしやい」

と細君が云つた。

「お腹を空かして來て頂戴、みんな」

三つになる下の男の子は、細君と一緒に家で留守番だ。仕方がない。釣堀へついて行く

にはまだ小さ過ぎる。

父親は家を出ると、氣持がよくなつてゐた。何でも新しいことをやりに行く時の氣持はいいものだ。それに子供が意氣込んでゐる。男の子は水遊びに使ふブリキのバケツを提げて來た。

「何でもかういふ風にやる方がいいな。この方がいいさぎよい感じでいいな」

子供のバケツを見て父親は考へた。

釣れるか釣れないかが問題ではない。バケツを提げて出かけることが大事なのだ。何でもないやうなことに見えるが、かういふのがもしかするとコツかも知れない。

何にもしないといふのが、だいいちよくない。休みの日は大抵彼はぐづぐづして過すのだ。今度の日曜日はひとつ何處へ出かけようといふ風に計畫を立てることをしない。

無論、出かけもしない。子供と細君に相濟まない氣がすることもあるが、この父親はもうずつとそんな具合にやつて來たのだ。さうして、子供の方でもそれに馴れてゐる。休みの日は家にゐて、自分らで遊ぶものと決めてゐる。それで結構楽しんでゐる。

だが、物ぐさはよくない。釣堀までは歩いて十分くらゐで行けるのだ。

前は田圃で、その向うに灌木の茂みのある丘の斜面が見える。小さな魚を釣る初心者
の池と、大きな魚を釣る専門家の池と二つに分れてゐる。

日曜日なので、どちらも満員であつた。

「大人一人、子供一人」

初めて入場した父親は、電車の切符を買ふやうなことを云つて、一時間分の代金を拂
ひ、エサと貸し釣竿を二本貰つた。前に使つた者がいい加減なことをして戻して行つたの
で、糸が滅茶苦茶に巻きついてゐる。針が引つかかつてゐるので、どうして解いていいか
分らない。

釣れないので氣を悪くして歸つて行つた客の釣竿ではないかと思はれる。

釣堀の小母さんが解いてくれた。

「大丈夫ですか」

「ええ、釣れますよ」

小母さんが笑ひながら答へた。

男の子は糸が解けるのが待つてゐられなくて、あつちへ走つて行つたかと思ふと、すぐ

戻つて来て、「早く、早く。あそこがいいよ、お父さん」と叫んだ。

男の子が「あそこがいい」と云つたのは、しかし、専門家の池の方であつた。そちらでは彼等が借りたやうなちつぽけな釣竿を持つてゐる人は一人もゐない。それに料金も高いのだ。

「ダメなの、あつちは」

と女の子が云つた。

「だつて、大きい魚があるんだから。来てごらん」

「ダメなの」

小さな聲で女の子が云つた。

「あつちは難しいの。初めて釣る人はこつちでやるの」

「なーんだ」

父親は小母さんにエサの付け方を教はつて、子供たちが釣つてゐる場所へ行つた。そこには夫婦者や大人の男もかなりゐた。

二本の釣竿で三人が釣つたが、一向にかかつて来る様子がなかつた。男の子はあらで

釣れるとあちらへ走つて行き、こちらで釣れるとこちらへ走つて來、その度に大きな聲で、「こつちが いいよ。お父さん」と呼んだ。

「いいかい」

と父親は男の子に云つた。

「釣れても、釣れなくても、最初に坐つたところにゐるものだ。ほかの人が釣ると、そこがよく釣れるやうに見えるけれども、それは間違ひで、そんな氣がするだけのことなんだ。うまい人もあれば、下手な人もある。うまい人だつて、自分の場所を動かずに根氣よく待つてゐるからかかるんだ。ぢつとしてゐることが出来ないやうでは、とても釣りはやれないよ」

話してゐるうちに父親は、中學校の時に習つた英語の教科書に「スティック・トゥ・ユア・ブッシュ」といふのがあつたことを思ひ出した。

みんなで山へ苺つみに行く。方々に茂みがある。思ひ思ひに探し始めると、そのうちにあつちでもこつちでも「苺を見つけた!」といふ嬉しさうな聲が聞える。まだひとつも見つけることの出来ない少年は、その度に聲のした方へ飛んで行く。そして、他の者が籠に

いつぱい取つた頃に、少年の籠の中にはまだほんの少ししか葎がなかつた。

「それでは駄目だ。自分の葎みにくつついてゐなさい」

と教へられる。何ごとをやるにしてもさうだと云ふ話であつた。その時は、何だか無味乾燥な、面白味のない話のやうに聞えた。

「ああ、あれと同じことをおれは子供に云ひ聞かせようとしてゐるんだな」

と今は父親になつてゐる彼が思つた。

男の子はそれまでよりは騒がなくなつたが、自分たちのあるところではちつとも變化がないし、他の人のところではちよいちよい魚を引き上げるので、その度に、

「ちよつと見て来る」

と云つて走つて行つた。

父親の方はもうずつと自分の葎みを離れずにゐたが、水の底に魚があるのか、ゐないのか、それさへ分らなかつた。

「駄目らしいな」

彼はとなりで自分のウキを見つめてゐる女の子に云つた。